



日本の悠久の歴史をひもとけば、そこにはわが国を支えてきた「なでしこ」たちの存在があります。福岡の人気歴史家・白駒妃登美さんに、そんななでしこたちの知られざる歴史物語を紹介していただきます。

しらこまひとみ  
博多の歴史家 白駒妃登美

それをクリアした上で話ですが、まず世の男性が学べきは、光源氏の女性に対する接し方でしょう。彼は人前で女性を悪く言うことがなく、二人でいる時も女性に決して恥をかかせたりしません。それは、単に優しいというだけでなく、女性に対する

### 世の男性が学べきは

『源氏物語』は、女性以上に男性が読むべき物語である、というのが私の持論です。ただし読む際に注意点があります。それは、当時と現代では婚姻制度が全く違うということ。現代の倫理観や価値尺度で登場人物を裁いてしまうと、そこからは深い学びが得られません。そういう形式的なことにとらわれず、この物語を通して紫式部が何を伝えたかったのか、想像を巡らせながら読むことをお勧めします。

## 千年の時を超える人間学の最高峰 源氏物語を描いた紫式部②

る敬意が根底にあるからです。さらに、光源氏の父である桐壺帝。この方は、もう神の領域というか、女性である紫式部が、理想の男性像を描いたとしか思えないのですが、だからこそ学び甲斐があるというものです(笑)。

### 式部が表現した愛

帝は桐壺更衣というただ一人の女性を、全身全霊で愛しました。だからこそ光源氏という、並外れて優れた子どもを授かることができたのです。平安貴族たちが結婚を出世や勢力争いの道具にしていた時代に、式部は真実の愛の尊さを、そして命の輝きを伝えたかったのでしょう。やがて帝は、心から愛した女性に先立たれ、悲しみのどん底に突き落とされます。すると帝は、桐壺更衣のお母さんに真心を



紫式部(生没年未詳) 平安時代中期の女性作家、歌人。藤原宣孝に嫁ぎ、一女を生んだ。

【イメージイラスト】  
アオジマイコ